様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　２日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０１５７
研究課題名（和文）　南宋・張炎『詞源』楽律論の研究

研究課題名（英文）　A Musicological Study of Zhangyan(張炎)’s *Ciyuan*（詞源）

研究代表者
明木　茂夫（AKEGI SIGEO）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：10243867

研究成果の概要（和文）：中国・南宋の文人張炎の『詞源』巻上は、当時隆盛した文人歌曲である「詞」に関する楽理書である。その内容の難解さに加え、漢文で書かれた音楽理論という特殊性の故、従来その本文と図表の意味する所は充分に解読されていなかった。本研究では『詞源』各伝本の校勘、歴代の楽書及び他の分野の書籍との比較検討を通じて、『詞源』巻上各条目の音楽理論を解読し、その詳細な訳注を作成し、付録として中国古典音階一覧表を作成した。

研究成果の概要（英文）：″Ci″(詞) is a form of the artistic songs of literati in Song(宋) Dynasty in China. Zhangyan(張炎)’s *Ciyuan*(詞源) is a book of the musical theory of ″Ci″(詞) and is also of the instruction of singing and performance of ″Ci music″(詞樂). This is the musicological study of *Ciyuan*, especially on the musical scale, pitch name, solmization, and the key changing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	400,000	120,000	520,000
２０１２年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：　張炎『詞源』・五声七声十二律・詞学・詞楽・宮調・犯調・中国古典音楽理論

１．研究開始当初の背景

「詞」は中国唐五代から宋代にかけて隆盛した一種の文人歌曲である。その「詞」の理論書として最も重要な書籍の一つが南宋・張炎の『詞源』上下巻である。巻下は詩歌としての「詞」の文学論であり、文人の詞の創作に直接関わるものとして歴代重んじられ、注釈書や訳注書も普及している。一方巻上は歌曲としての「詞」の音楽理論書であり、陰陽五行説や音律理論とも関わる一方、俗楽の奏法や歌唱法とも関係が深い。一般には読解が困難な専門書であり、注釈書も限られたものしかない。殊に我が国では、部分的に言及されることはあっても、本格的な訳注などは従来存在しなかった。

２．研究の目的

その文学史上の重要度に比して本格的な訳注の少ない『詞源』巻上に対して、詳細な注釈を加え、その述べる所をわかりやすく解説し、さらにその読解を助ける図表などの参

照資料を作成して、訳注書を作成することを目的とする。特に巻下の文学論については既に日本語の訳注書が出版されている点に鑑み、できるだけこれと体裁を統一し、将来的には上下巻の訳注を通覧できるようにすべく、そのための基礎データとすることも考慮した。また本書には図表も多く、通常の「翻訳」ということにはなじまない。よって図表の意味するところを解説する「通釈」の形を採り、本書の図表の理解が少しでも容易になるよう配慮する。さらにその理解を助けるための補助的資料も作成して、これに付録として添えることとした。

３．研究の方法

まず写本・板本を含む『詞源』歴代の伝本を収集して比較し、テキストおよび図表の異同を整理して、異同表を作成した。文字の異同については各条の訳注の冒頭に置くこととしたが、一方図表については、各条訳注とは別に図表のみの異同表を作成した。各本の図表をスキャニングにより画像データとし、これを同一図ごとに並置することにより、各本の図表の違いが容易に見て取れる形とし、字体・記号形状・文字や記号の配置・その位置関係などを比較検討した。

そこからテキストの校勘を行い、出現する用語を、他の書籍の典故や用例を参照しつつ解釈し、訓読・通釈としてまとめた。特に音楽用語については、現代の研究論文や音楽辞典を参考にしつつ、歴代の楽書・律暦書・類書類・日用類書に見える用語の用法を『詞源』と比較し、それぞれの意味合いを明らかにした。それと同時に、本書の述べる音階の理論に関して、その読解を助けるべく、理論上成立し得る中国古典音階の全てを、同主調・平行調・同調式・三分損益生成順など、様々な方式で配列した総合一覧表を作成した。

４．研究成果

『詞源』巻上の音楽理論各条目の、従来読解が困難であった箇所について、各伝本の比較、図表と本文とを合わせた解釈、他の資料との比較検討を通じて、一通り解読を完了した。また幾つかの図表は長年にわたる書写の過程で乱れを生じていたが、これらについても意味の通る本来の形に復元した。

こうして得られた成果を、既刊の『詞源』巻下の訳注とできるだけ体裁を合わせつつ、訳注原稿の形に整理して、冊子として印刷製本し、関係研究機関ならびに研究者に配布した。また訳注本文に併せて、別冊附録として音階一覧表を添付した。

特に本研究により明らかとなった点を以下列挙する。

（１）従来詳細が知られていなかった中国国家図書館所蔵、および南京図書館所蔵の『詞源』手鈔本を調査し、その系統を明らかにした。「宮調應指譜」を南京図書館本が「宮調應字譜」に作っているなど、他の諸本に無い特徴があることが見出されるが、それは単なる誤写に属するものとであるとは言え、同時に写本の系統を明らかにするためのデータとなり得る。

（２）「五音相生」条の述べる「所生」の順が、いわゆる三分損益の生成順ではなく、五行相生の生成順に一致していることを示し、本条が陰陽五行説に基づく典型的な五音の相生を論じていることを明らかにした。そしてそのことは、「理論的な内容からより実用的な内容へ」、という『詞源』巻上全体の構成に於ける、まさにその理論的な部分の基礎として位置付けられるものであると言える。本条以降の数条はこれを引き継いで理論的・思想的な内容が続く。

（３）「陽律陰呂合聲圖」は十二支と月建・月辰の配置、およびその「合」を示す図であるが、そこに同時に十二律呂の対応がどのように組み込まれているかを解き明かした。またそのことを踏まえ、従来の写本の多くは十二支の各文字を置く場所を誤っていたことを明らかにし、その正しい位置を、「巳」は七月辰と四月建を結ぶ位置、「午」は五月建と六月辰を結ぶ位置、「未」は六月建と五月辰を結ぶ位置、「申」を四月辰と七月建を結ぶ位置と、それぞれ確定した。

（４）「律呂隔八相生圖」の従来の写本に見られる空格は単に伝写の誤りであり、正しくは十二格であることを明らかにした。また「上下相生環圖」の正しい線の結び方を検証し、この図の意味を説き明かした。特に、写本に見える空格がいわゆるピタゴラスカンマの蓄積による誤差を示したものだとする従来の説に対しては、この図はむしろ伝統的な通常の十二律呂旋宮図であり、律学的な誤差の処理が本条に現れるのはやや唐突であることを根拠に疑問を呈した。

（５）「十二律呂」一覧表の各「均」調名の相互関係を整理し、その俗名の命名規則を明らかにした。理論的に成立し得る八十四宮調を「正調」系・「中管調」系・「高調」系・「中管高調」系に分類し、「中管」が一律（半音）高いこと、「高」が二律（二度）高いことをそれぞれ表すことを示し、さらにそれぞれの均（律）に属する各調の命名法には、唐代と宋代の律高の差など、律呂調と俗楽調の相互関係という要因が絡んでいることを解明した。

（６）「律呂四犯」の角調式（閏調式）の調名の矛盾を、俗楽調から見た律呂調の読み替え、という観点から解決した。これにより、角調を律呂調と見なした場合に生ずる音程

配置と調名の矛盾を説明できることとなった。具体的には、
○律呂調の「大呂變徵」調と下徵調（俗楽調）の「夷則角」調は音程配置が等しいこと。
○唐律と宋律には二度の音高差があるため、宋の「夷則」は唐の「無射」に相当すること。
○俗楽の角調式は律呂調の變宮（閏）調式と音程配置が等しいこと。
という三つの要因により、「律呂四犯」の第四犯の調名が定められている、ということである。
（７）「結聲正訛」の難解な本文を、管楽器の奏法に関する用語を軸に解読した。さらにこの条がその前の条に示された「同一住聲」という原則に外れていることに着目し、それが楽器の性能と奏法から来ることを解き明かしつつ、そこから本条が前の条に対する例外規定という役割を持つことを明らかにした。
（８）以上の（２）から（７）で述べたことを総合的に考えるに、『詞源』巻上の最初の数条、即ち「五音相生」から「律呂隔八相生」までは理論的・思想的な内容となっており、それに続く数条、即ち「律生八十四調」から「十二律呂」までは、音楽の基礎的な理論を述べる内容となっていると言える。基礎的とは、音楽の演奏や歌唱に直接関わるものではないにせよ、その基礎として欠くべからざる音名（音高）・音階・調などの理論を言う。そしてそれに続く『詞源』巻上の最後の数条、即ち「管色應指譜」から「謳曲旨要」は、詞楽の演奏や歌唱に直接関わる音符・転調・奏法・演奏に際しての調の運用などが示されている。このことは、『詞源』巻上が理論書と指南書という二つの性格を持ち合わせていること、しかもその全体が「理論から実際へ」という構成となっていることを示していると言える。即ち、従来は個別の条について部分的に言及されることの多かった『詞源』巻上だが、やはり全体の構成を考慮しつつ各条を解釈すべきであると言えるのである。従来散見された、理論的・思想的な内容の条目に部分的に実用的な俗音階理論を持ち込んだり、至極典型的な十二律呂の旋宮を論ずる条目にいきなり律学的な細かな音程差を持ち込んだり、といった解釈は、今後こうした全体の構成という観点から見直されるべきものであると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）

①明木茂夫、張炎『詞源』巻上譯注稿「十二律呂」
データ公開のために自主的に作成した冊子『張炎「詞源」巻上譯注稿』、査読無し、2012年３月28日、p.47-56

②明木茂夫、張炎『詞源』巻上譯注稿「律呂四犯」
データ公開のために自主的に作成した冊子『張炎「詞源」巻上譯注稿』、査読無し、2012年３月28日、p.57-75

③明木茂夫、張炎『詞源』巻上譯注稿「結聲正訛」
データ公開のために自主的に作成した冊子『張炎「詞源」巻上譯注稿』、査読無し、2012年３月28日、p.76-96

④松尾肇子、國家圖書館（北京）所藏『詞源』明鈔本・南京圖書館所藏『詞源』清鈔本解説
データ公開のために自主的に作成した冊子『張炎「詞源」巻上譯注稿』、査読無し、2012年３月28日、p.204-211

⑤明木茂夫、張炎『詞源』巻上譯注稿別冊資料音階一覧表
データ公開のために自主的に作成した冊子『張炎「詞源」巻上譯注稿別冊』、査読無し、2012年３月28日、p.1-18

⑥明木茂夫、『詞源』巻上「陽律陰呂合聲圖」考　―その二重循環の意味するもの
中京大学文化科学研究所『文化科学研究』、査読無し、Vol.23、2012年３月10日、p.57-71

⑦松尾肇子、『詞源』鈔本紹介
中京大学文化科学研究所『文化科学研究』、査読無し、Vol.23、2012年３月10日、p.25-34

⑧明木茂夫、張炎『詞源』巻上譯注稿（三）「律呂隔八相生圖」
中京大学文化科学研究所『文化科学研究』、査読無し、Vol.23、2012年３月10日、p.35-56

⑨松尾肇子、張炎『詞源』巻上譯注稿（二）「解題」
中京大学文化科学研究所『文化科学研究』、査読無し、Vol.22、2011年３月31日、p.1-4

⑩明木茂夫、張炎『詞源』巻上譯注稿（二）「陽律陰呂合聲圖」
中京大学文化科学研究所『文化科学研究』、査読無し、Vol.22、2011年３月31日、p.5-20

⑪明木茂夫、張炎『詞源』巻上譯注稿（一）「五音相生」
宋詞研究会『風絮』、査読無し、第７号、2011

年３月 25 日、p.78-94

〔学会発表〕（計１件）
①松尾肇子、関于劉過的詞（劉過の詞について）、会通与転化－第二届古典文学国際学術研討会、2013 年４月 27 日、中華民国東呉大学外双渓校区国際会議庁

６．研究組織
(1)研究代表者
明木　茂夫（AKEGI SIGEO）
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：10243867

(2)研究分担者
松尾　肇子（MATSUO HATSUKO）
東海学園大学・人文学部・教授
研究者番号：20202319